若者

西ドイツの教育制度

藤　原　　敏*

1974年5月から17カ月間幸運にもロータリー財団奨学生としてドイツ連邦共和国(西ドイツ)へ出張する機会を得た．早いもので帰国して1年半になるが，留学中に大学生はもとより数多くの若者，ロータリークラブ会員の紹介で州政府文部省の係官とも教育制度について話しをする機会を持つことができた．

最近，我国でも大きな社会問題の1つに教育問題があり，その諸悪は大学入試制度にあるとしてその改革が検討されている．そこで，この機会に西ドイツにおける教育制度と最近の問題点について簡単に紹介したい．

西ドイツでは高等学校を卒業した者には誰でも希望する大学・専攻への入学を許可することがたてまえになっている．こう書くと西ドイツの生徒達は楽でいいとも考えられるが，実際はこの高等学校を卒業するということが日本のそれと異なり非常に困難な状態にある．すなわち，大学に入るための競争は日本流にいえば小学校4年生から5年生に進級する際に早くも第1の関門がある．4年制の小学校（Grundschule）を終えると両親の意向と本人の希望，能力によって，9年制の高等学校（Gymnasium），6年生の実業学校（Realschule）あるいは5年制の中学校（Hauptschule）のいずれかに振りわけられる．これらの学校はそれぞれ教育目的が異なり，当然のごとく教育内容も異なっている．教育程度は中学校，実科学校，高等学校の順に高くなっており，中学校卒業までの9年間が，義務教育期間である．将来，大学へ進学する者は高等学校へ，また，商業・事務関係での中堅の資格を得る者は実科学校へ進学する．中学校卒業者はどうするかといえば，さらに2年制の職業専門学校（Berufsfachschule）へ進学することも出来ますが，大部分の人達は職業人としての生活が始まるわけである．最初の3年間は見習い（Lehrling）期間として職場の職長（Meister）の指導で実習をしながら，週1日だけ職業学校（Berufsschule）へ通学し，一般教科と専門の勉強をする．18才までは義務教育の一部として，この職業学校へ通学させることが雇用者の義務となっている．この期間見習い生は日誌をつける必要があり，週一度は職長に見せるし，月一回は職業学校の先生に見せているようである．また，見習い期間中も職業により多少の差はあるが約400～600DM（5～7万円）の給与を受けている．この職業学校の詳細は紙面の都合もあり，本稿ではふれないが，現在西ドイツには約50種類ほどにわかれた立派な職業学校がある．

これまでの教育制度では，たとえば，小学校卒業後一度実科学校へ入学してしまうと，途中で大学進学を思いたっても，高等学校に転校することが出来なかったが，最近は進路の決定時期があまりにも早すぎるということもあり，小学校卒業後の2年間を進路変更のための猶予期間としている．さらには高等学校卒業者以外にも大学進学の道が開かれている．すなわち，中学校卒業者も職業生活を経験しながら上構職業学校（Berufsaufbauschule）や夜間高等学校（Abendgymnasium）等で卒業試験に合格すると，大学入学資格が得られる．このような道を「第2の教育の道」(Zweiter Bildungsweg)と呼んでいる．さらに，10才の時点で事実上の将来の道が決定されるという問題改善のために約10年前から新しい試みによる学校が設立されている．それは従来の小学校卒業後三本にわかれた進路を制度的に，一本化し全ての子供に15才まで共通の一般教育をしながら各人の能力をみた上で，その後の進路を決定しようとするも

*藤原　敏（Satoshi FUJIWARA），大阪大学工学部，溶接工学科，教務職員，溶接設計学

ので，これまでの進路変更が不可能であった独立した学校群から統合されたものになり，これを総合制学校（Gesamtschule）と呼んでいる．現在，国内に約100校あり，この制度はまだ問題もあるが，高く評価されているようである．中学校卒業者に「第二の教育の道」があるのと同様に，将来の中堅としての教育を実科学校で受けた者にも，更に教育を受けて大学への道が開かれている．すなわち，たとえば工業系でいうと，実科学校卒業後2年制の専門高等学校（Fachoberschule）での教育の後さらに専門単科大学（Fachhochschule）を卒業すると技師（Graduriert Ingenieur）の資格を得ることが出来るし，希望すれば同一系学科のある，総合大学あるいは，工科大学に進学することが可能となっている．このように西ドイツの教育制度は，非常に複雑ではあるが，最近では各人の能力にもよるが，希望すれば順次より高度の学校に進む道が開かれている．

これまで唯一の大学進学への道とされてきた高等学校では9年間の一貫教育が行なわれるが，日本式のエスカレータ式教育と異なり，各学年ごとに進級試験があり毎年何パーセントかの生徒が落第しているようである．非常に厳しい試験のためか，自分の能力と将来とを考えて自殺する生徒の多いことが，新聞紙上で報道されていた．運よく年ごとの進級試験に合格しても，最終学年でアビトウア（Abitur）と呼ばれる卒業試験がある．これは日本での大学入試に相当するものであるが，この試験を受けるまでに，生徒の約半数近くが，落伍するか，落第を経験しているという話を聞くと，日本の進学競争のほうが楽のように考えられるから不思議である．それというのもこの卒業試験は，各科目について口答試問があり，一夜づけがきかない．その上この試験は，二度しか受けられず，二年目も失敗すると救済の道がないそうである．

無事卒業試験に合格しても，卒業者数の増加に比して大学入学定員の増加が少ないため，希望通り進学できない学生の数が増えている．このため最近では，文頭でも書いたドイツの教育制度のたてまえが現実となっていない．

現在，西ドイツの大学は，学位授与権を持つ総合大学（Universität）工科大学（Technische Hochschule）等が約30校，高等学校以外の教員を養成する教育大学（Pädagogische Hochschule）が約60校，それに音楽大学（Hochschule für Musik）や芸術大学（Hochschule für bildende Künste）が約30校あるが，その他の各種単科大学を含めても1973年現在総大学生数が約50万人強と日本のそれに比して非常に少なく，高等学校卒業生達（Abiturienten）にとって，大学入学は困難なものとなっている．そこで必然的に，入学許可は高校での卒業成績順になっている．学部，専攻によって全国レベル，州政府レベルそれに，各大学レベルで入学許可を審査する選考委員会があり，医学系学部など競争率の高い学部，専攻への入学許可は全国レベルでの選考が行なわれている．ちなみに，現役で医学部に入学するには，1から6までに分けられている高校の成績の平均点が，1.4から1.6なければならないといわれている．ある若者の話しでは，このような成績をとることは不可能に近いとさえいっていた．もし現役で入学できる成績でなくても，平均点が2点以上の者には，救済措置として何年か待つことによって，特別入学の順番が回ってくる．以前はこの間，他学部に籍を置いておけたが最近はそれも認められず，待ち時間の間，学生は病院で補助的な仕事をしたり軍隊に行ったりしている．最近，この待ち時間制度が，大きな問題となり，2・3年先には入学試験を実施しようという動きがある．6年間も病院で働きながら，医学部入学を希望している若者にあったが，彼はこの問題に頭をいためていた．文学部あたりでは，大学単位で入学許可の選考が行なわれており，比較的容易に入学出来るようである．このような選考後入学出来ても，各学期の試験は口答試問を含めて非常に厳しく，エリート候補生たるべく容赦なく振り落しが行なわれ，二度同一科目に失敗すると，その専攻の卒業は出来なくなり，他の学科・学部に移る者もいるくらいである．大学卒業までの最低必要学期は8学期（4年）ときめられてはいるものの実際は，平均して10～12学期を要しているとのことである．工

学部の学生を例にとると，4学期終了時に学士予備試験（Diplomvorprüfung）が行なわれ卒業までに二度の大きな関門がある．この予備試験に合格した後，半年間の工場実習が必須となっており，日本の各大学が行なっている休暇中の3～4週間の工場実習とは大変な差である．この長期間の工場実習と，先の職業教育制度とから西ドイツでは，理論だけでなく実技が学校教育の中で，大きなウエートを持っていることが推測できる．西ドイツでも大学が大衆化されつつあるものの，日本のようなエスカレータ式教育ではなく，今もってエリート候補生としての教育がなされており，大学生もよく勉強している．

一方，高等学校を卒業しても，大学に入学出来なかった者達の問題も大きなものがある．すなわち，高等学校では一般教育が中心で，職業教育は行なわれていない．このことから，このような卒業者は，公務員になるものが比験的多いが，他にも各州により，その制度は異なるようであるが道はひらけている．バーデンヴュルテンベルク州（Badenwürttemberg）では3年制の学校（Berufsakademie）がある．これは工業・商業・社会学系に分かれており，各系の学校にそれぞれ数種の専攻がある．ここでは2年終了で国家試験に合格すると，例えば技師補（Ingenieurassistant），3年終了すると技師（Ingenieur）の資格が得られる．

西ドイツにおける教育制度の概略と，その現状について簡単に紹介したが，決して厳しい面だけではなく，高等学校までの生徒達は，大体において授業は午前中だけで，午後は家庭で勉強する者，あるいは州・市から多額の補助を受けているスポーツクラブに属して身心を鍛える者が大部分である．日本のような学習塾は「第二の教育の道」を進む者を対象とした極めて数少ない塾があるだけで，しかも休暇中の宿題といったものもない．結局，大学教育をも含めて基礎の非常にしっかりした教育のように感じられた．

次に，留学先で経験したことについて簡単に付記したい．

私の留学先はマンハイム市（Mannheim）にある州政府・市それにドイツ溶接協会との三者共同利用による溶接技術教育・研究所（Schweisstechnische Lehr-und Versuchsanstalt）であるが，ここは現場の溶接技術者・技能者の教育が4割，独自の研究4割，それに技術相談・指導が2割といった研究所である．

ロータリー財団奨学生として，国際理解と親善に貢献することは当然ながら，私は前述したように，職業教育制度にも関心を持っていたので，最初の三ヵ月間ドイツ人と，東南アジア・中近東・アフリカ諸国から派遣された研修生達からなる研修課程に参加した．後進諸国からの研修生達と，親しくなったある日，彼等から彼等の住む立派な共同宿舎に招待された．この宿舎は，ドイツ政府が後進国援助の為に設立したもので，約100名の大学生・研修生が生活しており，そこで，まる半日・深夜までお互いに母国語と違うドイツ語で，色々話し合った．溶接に従事する者は，日本の溶接技術が世界のトップクラスにあることをよく知っており，なかには世界一であると信じもっている者も何人かいた．そのような彼等は，ドイツよりも日本での研修を希望していた．ドイツ政府は，後進国援助に多額の投資をしており，彼等の場合往復の旅費は，本国政府が支払い1年間の滞在費はドイツ政府の援助であるということを聞いた．大学生として学ぶ東南アジアからの一人は，個人的には日本・日本人が好きだが，東南アジアへ進出している企業の全てが，一様に利潤追求のみを考え，現地の社会に溶込む事をしないと非常に厳しい非難を聞かされた．彼は日本でいえば，通産省の役人でマンハイム大学で，経済学を勉強しており，将来は高級官僚への道が開けているとか，私も文部大臣命令による出張中の大学職員であると説明すると，日本の国情をよく知らないのか，聞きまちがいをしたのか，将来の日本との関係はうまく行くだろうと言って席をはずした．それにしてもスケールの大きな彼に感心するばかりで，何んとも言えない変な思いで帰宅したのを今でもよく覚えている．そんな彼に比べて，今の私にはこの機会に，生産技術振興協会に対して，会が中心となって，企業・その他の機関に働きかけて，大阪大学の

教官・現場で働く卒業生を講師として，東南アジアに一大学技指導センターでも設立して欲しいという希望を，本誌に書けるだけで，なんともいえない変な気持ちである．

留学中に得た経験を中心に，思いつくまま書かせていただいたが，本稿を終えるにあたり，ロータリー財団奨学生として，日本紹介という仕事のあった私が一番感じたことは，文化や風俗習慣の異なるわが国の事を相手に説明し，理解させるのは本当に難しいということです．天然資源にめぐまれないわが国が，生存の為に今後とも，国際化を進めねばならない状況を考えると，今後さらに世界の国々と，一層の相互理解を深めていかねばならないことは明らかである．

この意味において，次代をになう若者が，どんどん世界各国に出かけて，相互の理解と親善を行なう機会を持つことは，非常に素晴らしい事である．

最後に，海外留学という貴重な機会を与えていただいた．ロータリー財団ならびに，大阪大学の関係各位に心から感謝します．